

## 江戸言葉ゆかり現代語訛りのメモ

—日本語教育—資料として—

横 田 貢

### 前舌になりたがる若者の調音

江戸言葉では、指→<sup>ゆび</sup>いび、動く→<sup>うご</sup>いごく、悪い→<sup>わる</sup>わりいなどのような、母音のウ (u) がイ (i) に転ずる例は珍しくない。速さと勢いの、一つのお馴染みの音である。式亭三馬のあの『浮世床』（文化10年・1813年）などには、「わるい」と「わりい」とが、およそ半々の割合（26例：28例）で使われている。

ところが不思議なことに、この江戸訛り（埼玉の大部分の地の方言にもある）が、まるでレトロのように、若者に今大変な人気を呼ぶ。「わる (ru) い→わり (ri) い」はもとより、「まず (zu) い→まじ (zi) い」、「さむ (mu) い→さみ (mi) い」などといった調子で、愛用される。「わりい」の使用を文教大学情報学部学生男女各25人の調査例に見る。使用しやすいと答えた者、男60%、女16%と確認された。

う (u) から (i) への変身は、言うまでもなく舌が前へ出る仕掛けである。口蓋化である。舌を前へ送り舌の前部を口蓋部に軽く当てながら発音すれば、舌の摩擦によって息の勢いは強化され、ことばも押し出されやすい。この軽い勢いと言いやすさが、若者に受ける。ややもすれば、「何あすこにも居ねへ。悪い癖な野郎さ」（『浮世床』初編中）と言ったような江戸言葉のミニ版も、彼らの口から飛び出しかねない。

となれば、前舌発音現象は、少なくとも江戸の世から今に、変わらない。

いやむしろ舌の前送りの勢いは、益々進む気味にある。しんじゅ (ju) く (新宿) → しんじ (zi) く、ゆ (yu) く (行く) → い (i) く、よ (yo) い → い (i) い、など、次々登場する。強いて言えば、やっぱり (ri) がやっぱり (si) となる、(r) と (s) の入れ替えも、やや舌の前向き姿勢と見られよう。

舌の前進好みは、またギャルにも大もてである。かなり前からギャル語を造りつつある、あの文節切れ目のしり上がり型言い回しは、どうであろう。

「わたし<sup>が</sup>アー、朝起き<sup>て</sup>アー」のような、「がアー」・「てアー」のしり上がり長音は、助詞の「が」や「て」の普通型に比べ、音の延びの調子や勢いととも、舌も前へと出しゃばりがちになりはしないか。これで息の余りを最後に鼻へ抜けば、甘えの響きが出てもくる。

こうして若者やギャルが、江戸大衆振りに縁づいたからといって、もちろん、彼らが江戸にかぶれたと思えない。ただ何より言いやすさ、気安さのせいである。情報はより多く、より速い時代、気軽に言いやすい前舌表現も、一つの便利な口調としてさらに生きるチャンスを得るのではなからうか。

### 江戸大衆好み「エ」の長音の行方

弥次「ナニゼんてへ手めへが、あたじけねへから、こんな恥をかくハ」(『東海道膝栗毛』二編上) 有名作弥次喜多道中の一節、下線部は、音節後尾のエの響きが「エー (e:)」とある、いわゆるエの長音である。

江戸っ子、江戸大衆と来れば、「手めエー・きたねエー・くたばっちめエー」などと「エー」の連発を思い浮かべる。「エー」は、江戸大衆熊さん・ハツツアんことばの代名詞でもある。訛りは、特に江戸の後期になっ

て新たに開花したといわれ、それだけに江戸ことばの顔の中の顔である。

松村明は、「エー」の江戸訛りの出来方につき、ア (a) とイ (i)、ア

(a) とエ (e)、イ (i) とエ (e)、オ (o) とイ (i)、オ (o) とエ (e) のそれぞれの母音の連合を、示した。氏によれば、この中で (ai) → (e:)、(ae) → (e:) は、『浮世風呂』(文化6年・1809年) や『浮世床』に数え切れぬほどの例と知れる。一方、(oi)、(oe)、(ie) のグループの (e:) となる例は、おもしれえ (sir<sup>oi</sup> → sire:)、髪<sup>どけ</sup>床<sup>へ</sup> (dokoe → doke:)、教<sup>おせ</sup>える (osieru → ose:ru) といった調子で、訛る顔触れはごく一部の語に限られている、と言われる。

現代語、特に若者のことばは、果たしてどうか。確かに現代東京語では、職人ことばや下町ことばを初めとし、大<sup>でえく</sup>工<sup>せえ</sup>、財<sup>へえ</sup>布<sup>けえ</sup>、入<sup>へえ</sup>る、帰<sup>けえ</sup>るのような、名詞・動詞の例の訛りはおよそ消えてしまった。

ところが、「ない」などの形容詞(ないの助動詞用法も含む)の場合は、何とも様子が違う。分かんネエ・きたネエ・金ネエなどなど、エーの花盛りとなる。まるで江戸の遺産の処理分を、ここで一気に取り戻したかの感が、深い。とりわけ若者に、それが目立つ。

筆者の試みた、文教大情報学部生(一部国際も含む)男女25人ずつ対象の調査は、こうであった。選定した形容詞は、江戸大衆の慣例ではそうたやすく訛らなかった語彙である。

回答者の中30%以上が使うと答えた語が、男では何と調査語彙の70%(表中下線部のもの)、女でも40%を示している。

表 I

形容詞語彙	使用者パーセント	
	m	f
1. おもしれエ	<u>80%</u>	<u>96%</u>
2. かつこエエ (かつこいい)	<u>44%</u>	<u>36%</u>
3. 黒エ (くレエ)	<u>56%</u>	<u>36%</u>
4. せケエ (せこい)	<u>60%</u>	16%

5. 近エ (ちケエ)	<u>96%</u>	<u>72%</u>
6. 遠エ (とエー)	16%	8%
7. 低エ (ひケエ)	<u>48%</u>	16%
8. 細エ (ほセエ)	<u>48%</u>	20%
9. まゼエ (まずい)	<u>32%</u>	24%
10. 安エ (やセエ)	16%	24%

語彙の中、1・3・4・6・8・2 (あえて入れる) は、オイ (oi) の連合による訛り、7・9・10は、ウイ (ui) のそれに当たる。前者は、松村などの言うとおり江戸っ子達も遠慮がちに使った仲間である。後者に至っては、さすがの江戸っ子もとんと口にしなかった代物である。

いかに若者が、それらしく形容詞情緒内容を大事にしたいとは言え、彼らが、江戸っ子「べらんめえ」の勢いを越えたわけではあるまい。テレビや漫画 (例えば「ジャンプ」などの少年誌の形容詞は大半が「エー」の訛り) の影響は見逃せない。彼らは、より速く、間を置かず、より簡単に、解説抜きで生きた感を伝えたい。オイ・ウイの異種母音を重ねる代わりに、エエ (エー) とばかり同音連続の単純さで済ませれば、こんな便利なことはない。

便利さ・効率・一律性・直感性などをカギとしたい人々が増える限り、簡便安直な表現として「エー」訛りは、なお勢いを失うことはあるまい。稗島<sup>(注3)</sup>一郎によれば、英語などでも、例えばtime (taim) → (ta:m) のように、異種の重母音は、特に黒人社会では単音化が目立つ、と言う。大衆の志向は、単純化の力が何にも増して大きい。

### 巻き舌のしゃべりの今

巻き舌 (ラ行と限らずことば全体) の歴史は、古い。貞享3年 (1686

年)刊とされる、笑話集(咄本)の『<sup>かるくちつ</sup>軽口露がはなし』の中に、「亭主かしこまり、手をつき巻き舌の口上にて 申ける……(略)」と見える。

作者露の五郎兵衛は京都の生まれとか、話の種も、「六波羅の勧進帳」・「蛸薬師の日参」などと京都ゆかりの色が目立つ。とすれば、巻舌口調も、実は江戸ならぬ関西生まれの見方が濃くなる。

使用の場面も、初めはおおよそ決まっていたものか。そつなく言い立てる、お定まりの口上が、どうやら主であつたらしい。先の笑話集に遅れること70年、宝暦6年江戸で出された洒落本『風俗八色談』には、「口上の<sup>ながごと つまずき</sup>不調法な者でも。酒の奇妙は巻舌の長言に 跼なく……略」と説かれる。巻舌が、いかに口上表現と切れぬ縁にあったか、知れる。

18世紀の後半、巻舌は、次第に口上型を脱け出し始めた。『俠者方言』(明和8年・1771年刊、俠客の言語生活の一場面を描く)なる資料に、「酒を余ほど呑しやと見へて。巻舌にてヲ、イヲ、イ久米やマチャと呼」と示される。ここでの巻舌は、少なくともお定まり文句のそれではない。使い手はお兄さん、場面が深酒、さらにはラ行音節の語がないということが、注目されよう。

19世紀後半江戸大衆の花盛りの世で、生きた巻舌がどう展開したかは、分らない。それにしても、以上の経過で見る限り、口調はラ行に止まらず、力を誇る手合いから一般と次第に広がり、酔余のからみで盛行したことが、想像される。それは、必ずしも一般大衆にとって、完全日常化したとは思えない。

ましてラ行の音の言い方が、世のペランメエの完全型であつたかどうか、はっきりしない。音声学的にも、ラ行のすべてが巻舌になる明かしは、なお立たないのである。

日本語の巻舌は、そもそも弾き音(IPA=国際音標文字ではɾ記号)と称され、舌の先が、口蓋の部分か、その前方の歯茎の辺りを弾くような感

じで作られる。いわば舌の動きが、定まりにくい。中国語の捲舌音zhやch（舌の先をそらせて巻き上げ口蓋におよそ固定）のようなわけにはいかない。

弾きの強弱・回数により、舌の震えがもちろん変わる。つまり震えの度合いが、巻舌の強弱を決定づける。特に震えの強いものを、ベランメエー調の名で呼ぶ。こうした音の揺れの性格を踏まえ、ラ行音には、弱・中・強と三種の音（l・r・r）が混在するとも、見られる。一体ラ・リ・ル・レ・ロのどれが、三種の音のどれに当たるかは、はっきりしない。地域差・個人差・場面差なども影響しよう。江戸ベランメエー直系の生粋下町人で見える（生粋下町筆者の体験も含める）なら、「ラ」は明らかに震える音（r）になりやすい、と思える。

どちらかと言えぱなりにくいのが「リ」、ついで「レ」、「ル」と「ロ」はその中間でファジーな感じ、ともいう。

ところで現状は、一体どうか。また、文教大学生対象の調査一例を見よう。

表Ⅱ ※対象人数男女各25・表中\_\_は巻舌の部分

語	使用者パーセント	
	m	f
1 びつ <u>くり</u> する	16%	4%
2 ど <u>しゃぶ</u> り	20%	4%
3 こ <u>れ</u> っきり	48%	20%
4 が <u>り</u> 勉	8%	8%
5 お <u>れ</u>	48%	44%
6 カ <u>レ</u> ーライス	16%	0%

調査語数も少ないし、文字のみの調査の限界もあるし、不足なところもあ

ろう。あえて主張しよう。巻舌にはなにくいかと察せられる、「リ」や「レ」について彼らの反応が、平均およそ20%あったことは、十分注視される。特に4の反応は、珍しい。

多くの人が国の到るところから集まり、多くの機会・場面で話を交わし合う、巨大な東京圏では、競り合い意識も自ら勢いついて、こんな結果を招くものか。

調子に乗った、テレビのトーク番組のしゃべり、気分酔いしれる演歌の口調、そこから発せられる強調ムードに衰退のない限り、巻舌表現に今や、縮小はないであろう。

もっとも一つだけつけ加えて、強調しよう。今の巻舌は、かつての江戸の世の、ことば全体に関わるその口調が消えて、自然に、ラ行の音を含むことばだけに絞られていることは、確かである。

### これからの日本語教育の中で

効率・速さ・せり合いムードの大都会の中で、暮らしのことばも、お定まりの型どおりとばかりはいかない。より速く、簡便で、カッコよく、とも行きたい。

そこには、正にことばの新しい動きが潜在するというわけである。

いわば新方言と名付けられるものもある。それらは、寒い・まじい・かたまり・行っちったなどの(イ)への訛り、だせエ・遅エ・凄エと言った(エ)への訛り、あるじゃん・もろ(非常に)はやい・それよっかなどの巻舌強化の傾向と、様々であろう。

ならば一体、教育対処はどうすべきか。第一に、これら若者達の愛用新語の語形特徴・成立の由来や使用の実態を、従来の共通語と対比しつつ説くことである。第二は、新方言と共通語、両者の使い分け、目的・場面別の意義につき、出来るかぎり助言するに越したことはない。そして第三

に、よく使い、より多くが使い、耳に馴染んだ語は、いかに共通語基準で評し得るか、考えるべきことである。

(注1) 小松寿雄『江戸時代の国語』ほかで指摘

(注2) 松村 明『江戸語東京語の研究』参照

(注3) 稗島一郎『言葉と社会』で指摘

(注4) 井上史雄『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』ほかで提示